福岡市埋蔵文化財センター　平成29年度考古学講座第6回
「人骨からさぐる中世の博多」岡山理科大学　富岡　直人　2017年12月16日13:30-15:30

はじめに

遺体は、ある人生の最終形態であり、その人の人生を物語る。そのため、特定個人のみならず、名も分からぬ庶民の遺体であっても、歴史学上調査が重要といえる。

中世の博多遺跡からは多くの遺体が出土しており、市史編纂事業の一環として動物遺存体調査を実施した（富岡・屋山他2011）。人骨資料もこれに連動して再調査を実施した。これらの人骨は、まさに中世博多を雄弁にものがたる資料であった。

1.　中世博多の遺体の出土状態パターン

中世博多は埋葬人骨が多く出土した都市として知られる（大庭1992,2002、菅波2008）。これらの人骨には、以下のような出土パターンがある。なお、本稿では中世を12世紀～17世紀初頭までとする。

① 棺を有する墓から出土したもの。副葬品（やきもの、化粧道具、銭等）を伴うことが多い。
② 散乱骨として出土したもの（埋葬されなかったのか埋葬された場所が損壊したため。溝や造成土、包含層が所属遺構、出土地点とみなされる）。
③ コンパクトに集骨され出土したもの（生骨と火葬骨があり、土壙直葬、やきものや木製の蔵骨器に入った例がある）。

このうち、①は上呉服町（博多遺跡26次調査）で発掘された13世紀前半の土壙出土木棺墓より出土した女性人骨やSK03出土の人骨、26次調査で発掘された13世紀前半の木棺墓より出土したやや高身長の女性（150.4cm：　中橋・永井1986による）が例にあげられる。

②の例は極めて多く、博多遺跡の特徴ともいえる。例えば、動物遺存体の整理が最もまとまって実施された博多遺跡35次調査の場合は、溝（SD）から出土した散乱骨格が15単位[1)]、さらに包含層中で出土した散乱骨格が3単位に対し、土壙(SK)は4、小穴=ピット(SP)は1、SFは3、不明は1であった。

また、③の例は、焼かれた場合と生の骨格の場合、さらに頭部のみが出土する場合がある。土壙墓より出土した火葬骨の例としては、地下鉄A区30号土壙（13世紀後半～14世紀中頃）、31号土壙（14世紀前半）の例があるとともに、可能性のある火葬骨を伴う土壙あるいはピットは店屋町工区等で知られている。白骨化した頭蓋骨と下顎骨のみを意図的にピットに埋納した例は26次調査地点（上呉服町、16世紀前半頃）で知られている。

また、吉母浜遺跡等の中世人骨は長頭が特徴的であることが知られているが（中橋他1985）、その傾向を示す資料も博多遺跡より複数発掘されている。

2.　肉好きだった？貴女　（築港線2次683号土壙出土成人女性、木棺埋葬例）

この講演会の広報で使われた写真は、この謎多き墓と骨格である。中世とするか異論もある12世紀前半のやきもの（青磁）や化粧道具を副葬品に伴っている。

上顎と下顎の切歯・犬歯・臼歯と、風化した下顎骨が出土した。比較的小型の大きさでありながら親不知とも呼ばれる第3後臼歯が出土していることから、体格の小さい成人であることが推定され、エナメル質を観察するとわずかに咬耗していることから、20代以降の女性と考えられる。また、第2後臼歯には摩滅したような面が残る。これは博多遺跡も含めた中世の人骨で似たような例が知られているが、その原因は分かっていない。顎のすぐ側には有機質の残存物がみられ、あるいは枕であったのかもしれない。

深い愛情とともに埋葬された様子がうかがわれる。何とも不思議なのは、ブタの可能性のあるイノシ

シ類左橈骨を副葬されていた点である。副葬品として、ブタの枝肉を選んだのだろうか？ただし、この骨は対になるべき尺骨という骨格がみられない。このことは、副葬された当初から、この骨は単体で入れられ、肉はなかった可能性が高いであろう。それにしても不思議な出土状況である。先史時代より中国ではブタの副葬例が知られているが、大陸の影響であろうか？

3. 左顔に病のあった熟年男性（博多遺跡 58 次調査出土成人男性、散乱骨例）

左顔に激しい骨増殖の痕跡を残す比較的大柄の下顎骨が、散乱骨として出土した。彼は歯並びも悪く、第 2 前臼歯は左右とも頰側に傾いている。この骨増殖や筋突起の変形は、きっと彼が咀嚼することも妨げたことをうかがわせる。また、彼は後臼歯の多くも失い、歯槽が閉塞していた。彼の切歯の部分は残っていないが、歯槽は残されており、その形状はやや貧弱な印象がある。本来、頑丈型の顔面であった彼は、このような骨増殖が生じるような逆境に陥りながら、生きる努力を続けていたことが、骨格の生体反応からうかがわれる。

彼の首より下の身体は、果たして何処に行ってしまったのだろうか・・・。

4. 焼骨の集積遺構（博多遺跡店屋町工区[2)]、集骨火葬例）

博多遺跡群で最も早い段階での発掘例であり、かつ遺体を集積し偏った部位を火葬した行為を詳細に研究したことで著名である（永井 1986）。この遺構と遺体は、中世日本の火葬儀礼の典型の一例を示している。

この頭部の焼骨集積遺構は、発掘地点や多数の刀創から『博多日記』に記された菊池一族に由来するとの考察もあり（折尾 1988、折尾他 1986）、現在は熊本県の菊池神社が福岡市教育委員会より預かって保管している。市史編纂関連の調査として、福岡市埋蔵文化財センターの支援も頂きながら、国立科学博物館坂上和弘氏とともに、菊池神社で調査をさせて頂いた（富岡・坂上他 2017）。詳細は富岡・坂上らの論考をご覧頂きたい。

既に永井論文で紹介されていた通り、出土骨格は、前頭骨頰骨突起(L)(R)が 98、頰骨前頭突起(R)が 109 に対し、軸椎歯突起の前及び後関節面は 110 点存在し、この数値から最少で 110 体の頭部・頸部がこの集積に含まれると推定された。マッチングが検討されている訳ではないため、本来は 200 体に由来する可能性さえ残される。

特に、第 2 頸椎（軸椎）は、一般にのど仏と呼ばれ、現代日本でも火葬後に拝まれる対象となっている。古代には第 2 頸椎が明確に蔵骨器に納められている場合と、蔵骨器からみつからない例があり、この風習がいつから発生しているかはわからないが、中世には意図的にこの骨格を埋納されることがあるということが知られており、この遺構でも意図的に集積した可能性がある。また、首と頭が連接した状態で燃焼されたものがあることが、軸椎の色調から推定された。

再調査で刀創は極めて多く発見され、先述の論文（富岡・坂上他 2017）で紹介した。このような創傷は、日本人類学会が編集に取り組んだ鎌倉材木座等の資料（日本人類学会編 1956）に匹敵する情報性を有していた。これらは、中世の斬首や闘争の作法が看取される貴重な資料である。

5. まとめ

以上のように、中世博多には複数の埋葬法で色々な素性の人々が埋葬されていた。特に出土が多いのは前半期と後半期で、中間期は出土例が少ない。今後寺域の調査で分布や帰属年代構成に変化があるかもしれないが、中世博多人骨の研究は日本の中世都市を考察する上で、貴重な知見をもたらすであろうことは間違いない。

註

1) ここで呼ぶ「単位」とは、骨の破片のまとまりである。そのため、マッチングを実施しない場合は、複数個体を含む可能性や、同一個体由来の骨格が拡散して埋存し、別の単位と認定されてしまう可能性がある。また、マッチングを経ても、同一個体由来か判断するのは困難な可能性がある。
2) 発掘後しばらくは、祇園町遺跡とも称された。

引用文献

池田次郎　1981　「出土火葬骨について」『太安萬侶墓　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第 43 冊』: pp.79-88

折尾　学　1988　「菊池一族の首級か－御供所町出土の人骨－」『よみがえる中世 1－東アジアの国際都市　博多』［平凡社］: pp.56-61

折尾学・池崎譲二・森本朝子・林田憲三　1986　「店屋町工区 C・D 区の調査」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ　博多　－高速度鉄道関係調査(2)－』（福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 126 集）: pp.18-132

大庭康時　1992　「博多遺跡群の埋葬遺構について」『法哈噠』1: pp.63-83

大庭康時　2002　「都市「博多」の埋葬」『中世都市　鎌倉と死の世界』（高志書院）: pp.119-139

菅波正人　2008　「墓」『中世都市・博多を掘る』（海鳥社）: pp.240-243

中橋孝博・永井昌文　1985　「山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨」『吉母浜遺跡』（下関市教育委員会）: pp.154-225

中橋孝博・永井昌文　1986　「博多遺跡群　第 26 次調査出土中世人骨」『博多Ⅵ　博多遺跡群第 26 次調査の概要』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 144 集）:pp.20-21

富岡直人・屋山洋・松井章・丸山真史　2011　「動物考古学からみた博多と動物の歴史」『新修福岡市史資料編考古 3』（福岡市）: pp.221-295

富岡直人・坂上和弘・江川達也・足立望　2017　「博多遺跡群店屋町工区出土中世焼人骨の研究」『市史研究福岡』12: pp.1-25

永井昌文 1986「付編Ⅰ　祇園町遺跡 D-Ⅰ区出土人骨群」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ　博多　－高速度鉄道関係調査(2)－』（福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 126 集）: pp.135-138, 図 1-4

日本人類学会編　1956　『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』（岩波書店）

山崎藤四郎　1890　「菊地寂阿櫛田の神殿と射たる事并博多日記之事」『石城遺聞』上（三養堂）